

SRI アナリストの仕事と評価

株式会社グッドバンカー
リサーチチーム

企業のサステナビリティを評価する SRI アナリストの仕事では、その企業の属するセクターそのもののサステナビリティと、そこから個別企業の評価に落としこむためのシナリオを構築する能力が必要になり、逆もまたしかりです。つまり大きなピクチャーから、小さな変異を読み取ったり、個別の企業行動の中にセクター全体の評価のキーポイントを見つけるのです。

そのためにアナリストは、自分の担当業種の歴史的な背景も頭に入れておかねばならず、その種の広汎な勉強は業務の一環になっており、読書の感想などはアナリストチームのなかで共有されます。

医薬品業界担当のアナリストが最近読んだ本の感想を述べました。

「先日購入させていただいた『世界史を変えた薬』を読み終わりました。各薬品の開発に至る背景や、それで命を救われた歴史上の人物などを交え、とても読みやすく書かれていました。

取り上げられていたのは、ビタミン C やペニシリン、アスピリンなど、比較的以前から薬として身の回りにある、一般的なものですが、驚くことにいまだに薬が効く仕組みや、組成など、すべてが解明されていないのです。

また最近、さまざまな医薬品の発明は多々あっても、ノーベル賞の受賞が少ないのは、その医薬品が何年もたってから副作用が出たり、実は効果が薄いことが判明するケースがあるからで、医薬品自体の評価のむずかしさを痛感していました。

ところが、アフリカの貧困層に蔓延し、失明の原因になっていたオンコセルカ症に劇的な効果を発揮するイベルメクチンという薬を開発して、今年のノーベル生理学・医学賞を受賞した大村智博士は、当社がサイエンス関連の技術評価で協働する 21 世紀構想研究会のアドバイザーであり、うれしいサプライズでした。

そのほか、医療の初期の頃は、病気の原因が環境なのか、細菌やウイルスなのか、対策として何が効くのか、まったくわからず、研究室での実験や臨床実験など、ひとつひとつデータを積み上げて、良い・悪い両方の結果を得ながら手探りで進めていたということを、改めて認識しました。

それゆえに、最近多発している製薬会社の研究データの改ざんというのは、根本をゆるがすもので、企業評価に際してはこの点に十分留意していきます。」

* 21 世紀構想研究会 <http://www.kosoken.org/>